語順の意味——英語を中心に

久保内端郎

一　型式構造の二重性

話をするという一続きの出来事を発話 utterance と呼ぶが、その発話は音声の連続から成っている。発音器官、聴覚器官それぞれの能力による制約があるけれども、言語に利用され得ると思われる音声はかなりの数に上るに相違ないが、どの言語もその可能な限りの音声を全て利用しているのではなく、その極く一部を選択して用いているのである。それぞれの言語で、意味の分化に関与している、すなわち示差的 distinctive ないし離散的 discrete な音声を、その言語の音素 phoneme と呼ぶ。[1] 現代の日本語（東京方言）では二四個、英語（アメリカ英語）では三三個[2]といった程度の数の音素が、普通、設定されている。言語間で音素の数はこのように異なるが、それはまた同時に、音素の体系が各言語で異なることも意味している。ラ行音に見られる流音 liquid を、日本語では /r/ 一種しか持たないが、英語ではそれを /r/ と /l/ の二種に区別する。[3] われわれが英語の /r/ と /l/ の識別に非常な困難を感じるのは、日本語がそれらをイーミック (phon)emic な、すなわち音素的違いとして区別しない音素の体系を持っているがために、われわれの聴覚がそれらの違いに格別の注意を払わないよう強く習慣づけられてしまっているからに他ならない。

言語の最小単位はこのような音素であるが、個々の音素それ自体は固有の意味を持ち得ない。それらの音素が種々に組合わされて或る結合を成し、更にその結合の上

に、韻律素 prosodeme と呼ばれるものが袋のようにかぶさって或る種の統一が与えられた時、それらはより高次のレベルの単位を構成するに至る。たとえば、英語で、音素 /u/ /b/ /k/ が /buk/ と配列され、同時にその上に /ˈ/ という型の韻律素がかぶせられると、《本》[4]という意味を喚起する或る一つの単位になるのである。これは音素の単なる連続とは質的にはもはや全く別種の単位で、文法構造の最小の基本的単位となるものである。このような、意味を表わし得る最小の単位を形態素 morpheme と呼ぶ。この形態素が /búk/ のような場合は単独で単語 word すなわち最小自由形式 minimal free form を形成するが、それに対して《複数》を示す形態素〔z₁〕——音声的には /s/ /z/ /iz/ /en/ /ø/ などの異形態を持つ——や、《小さい・重要でない》の意の形態素〔let〕などは単独で自立し得ず、/〔búk〕/ などに附属して単語を形成する。単語の意味的側面は意義素 sememe、その音声的側面は音形或いはかたち shape と呼ばれるが、この意義素と音形の連合は全く恣意的なもので、何らの必然性がないことに注意することが必要である。《本》の意義素を喚起する音形が言語によって異なることを見れば明らかであろう。《本》を /búk/ と呼ばなければならぬ自然的必然的な紐帯は何もなかったのである。ただ単に、その言語共同体の成員間において、社会習慣的に連合が成立しているにすぎないのである。

言語は、このように、それ自体では何らの意味も表わさない音素という単位が、ある配列をとり、統一性を与える或る種の韻律的特徴のもとに結合することによって、意味を示し得る単位、すなわち形態素・単語その他の文法的機能を持つ単位を構成し得るという構造上の特徴を持っている。この特徴が型式構造の二重性 duality of patterning[5]と呼ばれるものである。これが、人間の言語を、さるなどの人間以外の動物の閉じた伝達体系から区別する最も重要な点である。これによって人間の言語は開いた体系となり得ているのであって、どの言語でもその音素の数が五〇を越えることはほとんど無いにもかかわらず、数千ないし数万の形態素を所有することが可能になっているのである。もしわれわれの言語が、この型式構造の二重性と呼ばれる性質を持たず——その場合はもはや言語の名に、その真の意味では、価しないものとなるであろうが——、したがって、表出したいと望む意

識内容を表現し伝達する上で分節せざるを得ない経験世界の、その分節項目に対応する形態素という単位を、さらに分節して得られる音素という下位のレベルの単位の組合せ・結合によって構成することができないとしたならば、そして、動物の啼き声の体系のように、その個々の意味信号単位の一つ一つに相互に異なった音形を対応せしめなければならないとしたならば、どうであろう。分節せざるを得ない経験項目の数が大きければ、それぞれの意味信号単位間の音形の差は非常に小さなものとならざるを得ないであろうから、その（言語）共同体の成員の発音能力、聴取識別能力、記憶力等に過重の負担がかかり、言語構造的にも非経済的で不安定なものとなり、その言語体系は恐らくは崩壊するに至るであろう。或いは、崩壊しないまでも、ガリヴァ旅行記のバルニバービの賢人のように、その言語共同体の成員は、常に、「〔言語資材という〕大きな荷物をしょってほとんど倒れかかっている」ことになったであろう。人類が類人動物ホミノイド hominoid から、ホミニド hominid を経て、そしてホモ・サピエンス homo sapiens と進化する過程の或る時点で、前言語の段階から、最終的に、型式構造の二重性という性質を獲得した真の言語の段階へと革命的飛躍をなしたと考えられるが、そのことに思いをいたす時、感慨深いものがある。(6)

二　線条性と語順

前節で、形態素という単位が、音声的側面と意味的側面の連合する最小の言語単位であることを見たが、それが音声的側面を持つことから、それはその性格上時間の流れに沿わざるを得ないものである。ソシュール Ferdinand de Saussure はその『一般言語学講義』（一九四九年版）の中で、

能記〔形態素ないし単語の音声的側面、すなわち音形に当る〕は、聴取的性格のものであるから、時間のなかにのみ展開し、その諸特質を時間に仰いでいる：(a)それは拡がりを表わす、そして(b)この拡がりはただ一つの次元において測定可能である：すなわち線である。……言語の機構はすべてこれに依存する。（小林英夫訳（一九七二）一〇一頁）

と述べている。

われわれは、いかに瞬間的な意識内容であっても、言

語による表現に訴たえるならば、どうしても、この線条性によって、時間の軸の上にそれを流さねばならない。テレヴィジョンの原理は、被写体を点状に解像し、その各点を一定の順序に従って次々に電気信号に変え、その信号の線条を送信することにあるが、われわれの言語も、表現したいと望む心的映像をその機構に従がって解像し、その線条性を利用して伝達し、聴き手に話者のそれに似た心的映像を結ばしめんとするのだと言えよう。解像は、先ず、自立語にほぼ該当する意味単位で意味的に符号化をすることから始まるであろう。次に、それらに文法の要求する文法的修正を加えて、それらを文法的関係をもつ配置の中に配列し（文法的符号化）、そこに出来た形態素の符号列の音声的側面を実現化させるのであると考えられる（音韻的符号化）。すると、そこに音韻的線条が得られ、聴き手はこれを逆の手続きで解読していくのである。

意味的・文法的符号化を音韻的符号化に結びつけているのが、型式構造の二重性の存在である。またこの型式構造の二重性の原理を支えているのが、まさにこの線的特質 caractère linéaire すなわち線条性という性質に他ならない。両者が相俟って言語の機構を成り立たしめているのである。言語が、このように、時間のうちに展開する時間的事実であることを、再確認しておく必要がある。語順の問題もまさにここから生じてくるのである。

なお、以下に語順という場合は、主語・動詞・目的語・補語・副詞句等の文の主要構成要素間のそれを指す。その構成要素内部の語順の問題についてはここでは触れないことにする。

三　語順の機能

話し手の側で表出せんとする意識内容が言語的表現をとって音韻的に線条化され、それが聴き手において解読され、再構成されるこの段階で働いている原理は線条性・型式構造の二重性であると述べたが、聴き手はその原理に支えられて、その音韻的線条の背後に非線条的なものを読み取るのである。すなわち、彼は、音韻的線条を語ないし語群に分節する。しかも、語群も単なる語の連続ではなく、或る種の文法関係 syntactic relation の下に統合されたものと、言語習慣的に期待するのである。

たとえば、今ここに、

(1) John RAN.

という二語の連鎖が与えられるとすると、英語を母国語とする人であれば、直ちに、いわば言語本能的に、この二語を結びつけ、単なる語の連続以上の意味を持つ単位として解読する。この連鎖は文を成し、概略、《(今話題に上っている) John という行為者が走るという行為を過去においてなしたことを話し手が (事実として) 陳述している》といった意義[7]を表わしているのだと諒解するのである。このような意味が生じてくるのは、John と ran の二語が《主部＋述部》という文法関係を結び、それによってこれらの語が個々では持ち得ない特性を帯びてくるからなのである。それは「名詞 (句)＋動詞 (句)」の連鎖には、「AがBする」という関係を表わす《主語＋述語自動詞》という文構成の統合型 taxeme と呼ばれる、いわば型枠のようなものが、その背後にあってそれらの語を支えているからなのである。また、場面の脈絡 context of situation——ここでは談話の「前後関係」を指す——や、音調型 ↘、さらに、その音調の中心がこの文単位の最後の重い要素 ran に置かれていることから示されるこの文の無標性 unmarkedness、すなわち無強調性・無対照性等々もその保証となっている。

右の例は語順が逆になれば現代英語としては非文法的な文になるものであったが、次の例は語順が逆になれば文の意義も逆になるものである。

(2) The man killed the bear.

(3) The bear killed the man.

この例では名詞要素が二個になっているが、the man と the bear のいずれも、形態的には、いずれが《主語》の機能を持ち、いずれが《目的語》の機能を持つのか、を示す何らの標識 marker も有していない。にもかかわらず、(2) においては the man が《主語》、the bear が《目的語》となり、(3) では the bear が《主語》、the man が《目的語》という機能分化が見られる。この場合にも、このような「名詞句＋動詞＋名詞句」の配列の型は、「AがBをCする」という能動関係を示す《主語＋述語 (他) 動詞＋直接目的語》の意義を持つ統合型の具象化であり得るという文法規則が英語に存在していて、その統合型の意義によって、それぞれの文の二つの名詞要素に単語のレベルでは持ち得なかった意義が賦与されているのである。

われわれは英語においては、このように、語順が文の意義を知る上で極めて重要な要素になっていることを更めて確認した。線条の背後に非線条的なるものを再構築して得られた形態素・単語の符号列に主部・述部等の統合関係を現出させる指標を（現代）英語では、専ら語順に依存し、そこから得ているのである。

一方において、英語のように、語順が統合関係と密接に結びついて、文の意義の決定に大きな役割を果している言語が存在するに対して、他方、語順が統合関係に結びつけられている緊密度が低く、文の意義の理解に語順がさして大きな影響を与えないかのように見える言語が存在する。その例としてよく引き合いに出されるのはラテン語である。そこでは格関係が屈折語尾によって示されるがために、語順が比較的自由であったとされる。英語でも古英語 Old English（西暦一一〇〇年頃までの時期の英語の呼称）の時期では未だ屈折語尾が残っていたので、この傾向が多少見られ、たとえば、(2)の文の内容を次のような語順で示すことができたとされる。

(4)　Se mann sloh þone beran. (SVO)

(5)　Se mann þone beran sloh. (SOV)

(6)　Þone beran se mann sloh. (OSV)

(7)　Þone beran sloh se mann. (OVS)

などのように。それは、これらの文のいずれにおいても、se mann によって主格が（対格——直接目的語に当る——ならば þone mann）、þone beran によって対格が（主格ならば se bera）示されているために格関係が明瞭であったからである。しかし次節においても触れることになるが、独立節においては(4)の型が優勢、従属節においては(5)がやや優勢であったことなどから、支配的な、major な型が既に存在してそれらによって何らの強調の意義も付加されない無標の unmarked 文を作らしめ、他の minor な型によって何らかの強調その他の意義が付加された有標の marked 文を作らしめるという傾向を認めることができるのではなかろうかと思われる。

多かれ少なかれ、優勢な型からの逸脱は強調或いは焦点の違い、ないしは、少なくとも、何らかのニュアンスの違いの表現を意味すると考えられる。とすれば、語順の異なり様が文の意義・発話の意味を微妙に彩るものとなるから、その異なり様は文の内容の理解にとって極めて重要で、観察に価すると言えよう。因みに、ラテン語

の散文でもSOVの型がその基本的語順であったことが報告されている。[8] また、日本語においてもSOVの型が基本型であるとされている。[9]

このように或る語順を固定化して、他の可能な型の語順を強調の違いやその他の意味の伝達に利用しようとする傾向は、英語の言語的経済性への志向に関係するとともに、待機時間の問題にも関係があると考えられる。聴き手が音韻的線条を解読し、元の文を再構成する時、その語順が固定化されているならば、その過程の進行は淀むところがないであろう。それは、待機、すなわちサスペンスの時間が短く、その緊張の強度が小さくてすむことを意味しているからである。

語順一定化の傾向が一般に見られるとしても、その志向し収斂する語順が言語間で異なっていることは、語順すなわち文構成の統合型の形とその意義との連合が、形態素・単語におけると同様に、恣意的であることに思い至らしめる。(2)の文は日本語では、「その人がその熊を殺した」のようになる。英語でSVOの順で示す内容を、日本語では、普通、SOVで示すのである。現代英語ではSOVの順の

(8) *The man the bear killed.
は非文法的な文である。なぜなら、《主語＋目的語＋他動詞》という統合型が現代英語には無いからである。因みに、次のようなOVの例が見られるが、これらはOSV型の異型である。

(9) Two hours of her society—missed! J. Galsworthy, *The Forsyte Saga.*

(10) The present he should distrust; *the future shun. Ibid.*

また日本語でも「＊その人が殺したその熊を」とは言えない。日本語には《主語＋動詞＋目的語》の型の統合型が無いからである。あとから付け加えたり、或いは修辞法上の配慮から「その人が殺した、その熊を」ということがあるが、文法的には、もはやそれは一つの文ではなく、二個の文の結合されたものと考えざるを得ない。[10] 要するに、主語・動詞・目的語で構成する文法関係は必ずしも或る特定の時間的継起を暗示、或いは要求する訳ではなく、社会習慣的に、いわば黙契として、たとえば英語では、SVOの順の表現をとっているに過ぎないと言わざるを得ないのである。

四　英語の語順の歴史的変化

英語の歴史にはおおよそ、古英語、中英語 Middle English (一一〇〇—一一五〇〇)、近代英語 Modern English (一一八〇〇)、現代英語 Recent and Present-Day English (一八〇〇—) といった区分が認められ得るが、英語の語順がほぼ今のような状態になったのは、中英語末期においてであると考えられる。(11) 本節では古英語・初期中英語期を中心に、語順の変化がどのような形で進んだかを見てみようと思う。

先ず、古英語の語順を見てみよう。次に引用するのは、九九五年頃の成立とされる聖書の古英語訳である。これは当時のイングランド南西部の方言を中心とする一種の標準文語体で書かれたものであると考えられる。引用個所はマタイ伝七章二四節—二七節である。なお逐語訳を行間に付し、最後に日本語訳（文語訳より）を添える。

(11) 24 Eornustlíce (A) ǽlc ðæra [ðe (S)
Truly each of those who
ðás míne word (O) gehýrþ (V), and ða (O)
these words of mine hears and them
wyrcþ (V)] (S), biþ (V) gelíc ðam wísan
works, is like the wise
were, [se (S) hys hús (O) ofer stán (A)
man, who his house on(a) rock
getimbrode (V)] (C).
(has) built.

25 Ðá (A) com (V) ðær (s) rén (S), and
Then came there rain, and
mycele flód (S), and ðær (s) bleowun (V)
great flood, and there blew
windas (S), and áhruron (V) on ðæt hús (A);
winds, and fell on that house;
and hyt (S) ná ne (A) feoll (V), sóþlíce (A)
and it never fell: truly
hit (S) wæs (v) ofer stán (A) getimbrod (V).
it was on (a) rock built.

26 And ǽlc ðæra [ðe (S) gehýrþ (V) ðás
And each of those who hears these
míne word (O), and ða (O) ne (A)
words of mine, and them not

wyrcþ (V)] (S), se (S) biþ (V) gelic ðam
works, he is like the
dysigan men, [ðe (S) getimbrode (V)
foolish man, who (has) built
hys hús (O) ofer sand-ceosel (A)] (C).
his house on sand.

27 Þá (A) ríndе (V) hit (S), and ðær (s)
Then rained it, and there
comun (V) flód (S), and bleowun (V)
came floods, and blew
windas (S), and áhruron (V) on ðæt hús (A);
winds, and fell on that house,
and ðæt hús (S) feoll (V), and hys hryre (S)
and that house fell; and its fall
wæs (V) mycel (C).[12]
was great.

(二四さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。
二五雨ふり流みなぎり、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。
二六すべて我がこれらの言をききて行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。
二七雨ふり流みなぎり、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顚倒はなはだし)

右の例に見られる語順を整理すると次のような型が得られる。

a. SV…型（動詞が主語の直後にあるもの）
b. S…V 型（目的語その他の要素が中位置に入るもの）
c. VS 型（主語・動詞の位置が倒置されたもの）

たとえば、24節の主節はa型、従属節（形容詞節）はb型、25節の独立節にはc型とa型とが見られる。この三つの型が古英語の普通の型であった。

aは平叙文の独立節で最も優勢な型。
bは従属節で優勢な型。
cは疑問文（*hwæþer*…型を除く）、否定詞 *ne* 及び或る種の副詞が文頭に来る時等に用いられる型。接続詞によって導かれない譲歩・条件節にも見られる。

なお(11)の例で、24節は従属節においてb型の語順を示

しているが、26節ではa型になっていることが示すように、従属節で、語順はもはやb型をとらなくても良いと感じられて来ているらしいことを付け加えなければならない。それはこの時期に後続する時期に関する調査からも裏付けられる。

ともあれ、古英語においても、その散文では、語順は全く自由であったわけではなく、その中に三極にしぼられる支配的な型が存在していたことが観察されるのである。これらの型からの逸脱、すなわちその他のminorな型の語順をとることは、多かれ少なかれ、話者（作者）が何かを強調する意図、或いは修辞的・擬古的な意図——或いは期せずしてそうなったかも知れないが——等々があった場合と解釈できることが多い。

OSV, CVS の例。

(12) *Micelne geleafan* he hæfde…（彼は持てり、大いなる信仰を）

(13) *mære* is se God þe Daniel on beliefþ（大いなり、ダニエルの信ずる神は）

また稀にではあるが独立節に OVS, SOV の型も見られた。(11)に挙げた古英語訳聖書の成立とほぼ時代を同じくするÆlfric の *Catholic Homilies* (991–2) の St. Stephen の受難を述べた個所に、

(14) Þa *reðan* Iudei wedende *þone halgan* stændon. *Stephen* 50/17[13]（無慈悲なユダヤ人が怒り狂ってその聖人を石で苦しめた）

のような S-Noun O-V 型の例が見られる。これも後の時代から判断するところ、当時既に、古風な表現という印象を、聴衆或いは読者に与えたのではなかろうかと考えられる。もっとも動詞を文末に後置させる傾向のあった 'and', 'but' 等の接続詞に導かれた独立節では同個所に五例も見出されるばかりでなく、これは初期中英語期にも未だその名残りが見られるのであるが。

なお、目的語が代名詞の時、SOV の語順をとる場合が多い。たとえば、

(15) ic lufige *God*.（我神を愛す）

に対する

(16) ic *hine* lufige.（我彼を愛す）

のような例であるが、これはb型に入るものではなく、aの異形態と考えるべきだとされているのは次節で触れる後重(あとおも) end-weight の原則に類した言語感覚の存在

を示しているものと考えられる。

次に中英語における語順の傾向を初期中英語を中心に見て見ると、文頭に *ne* 'not' 以外の副詞が来る場合、古英語におけるc型、すなわち倒置構文が後退して、正置構文a型とほとんど同じ位の頻度でしか用いられないこと（たとえば一〇〇〇年頃成立の *Ancrene Wisse* などに見られる）、またa型は独立節においても着実に自らを定型化させつつあるが従属節においてもa型が圧倒的に優勢になることなどが目立った傾向として挙げられよう。

b型は衰退の一途を辿るが、その後退の様相に注目すべき点がある。古英語時代から書き継がれた年代記の中で最後まで続いた *The Peterborough Chronicle*（以下 *P. C.* と略す）と呼ばれる年代記には一一二二年―一一三一年迄の項（First Continuation, 以下 *P. C.* I と略す）と一一三二年―一一五四年迄の項（Final Continuation, 以下 *P. C.* II と略す）の二続きの継ぎ足し部分があるが、その後者の部分に、S-Noun O-V 型の語順が見出される（二例）。しかし、これらはいずれも先に触れた、古英語においてその節の動詞を後置させる傾向の認められる接続詞 'and', 'but' に導かれる独立節における例のみで、それ以外の環境（従属節は除いて）ではもはや見出されなくなっている。

[17] and hi *nan helpe* ne hæfden of þe king.(14) (1140)

（そして彼らには王からの援助は得られなかった）

さらに *Ancrene Wisse*（以下 *AW* と略す）に至ると、その環境においても見られなくなっている。したがって一二〇〇年頃迄には S-Noun O-V 型の語順は従属節を除けばほとんど消滅したと考えて良いであろう。*AW* の *and, ah* 'but' などの接続詞の後の環境において見出される例はすべて代名詞が目的語になっている（a型）。

[18] and he *hit* wule þe ȝelden. 28/34(15)（そして神はそれをあなたに返し給うであろう）

われわれはここに SOV 型の語順消滅への最後の相を見るのである。

次頁の表は平叙文における各環境で現代英語に見られる型の例がそこに現れる全ての例の中で如何なる比率（百分率比）を示しているかを示したものである。変化の傾向を大雑把ながら示し得ていると思われる。

各環境で現代英語に見られる語順型の占める比率

	Stephen[1] 991—2	*P. C.* I 1122—31	*P. C.* II 1132—54	*AW*[2] *c* 1200
独立節（副詞・等位接続詞で始まるものを除く）	76	81	77	84
〃 （*ne* 以外の副詞で始まるもの）	30	8	12	55
〃 （'and' 'but' で始まるもの）	70	80	85	85
従属節	41	72	80	90

1. *Stephen, P. C.* I, *P. C.* II の調査結果は B. Mitchell, 'Syntax and Word-Order in the Peterborough Chronicle 1122–1154', *Neuphilologische Mitteilungen*, 2 LXV, 1964 による。
2. *AW* は Part 6 と Part 7 の調査結果である。

五　現代英語の語順の特徴

前節で、古英語においても語順が全く自由であったわけではなく、いくつかの極にまとまる傾向が既にあったことを見たが、現代英語では更にその多様性を減じ、基本的語順としてはa型一本となっていると言っても過言ではないまでになっている。代名詞による格関係の表示、主語・動詞間の数・人称の一致などは完全に余剰と見なされ得る。また一般疑問文を作る助動詞 do の使用は、それと主語との間は倒置になるが、主語と本動詞の関係は正置になることを可能にしていると言えよう。また、古英語の非人称構文が、現代英語にあっては人称構文化していることなども、現代（近代）英語における SV 語順の強さを物語っていると言える。次に、文ないし節単位の線条に見られるそのいくつかの特徴を簡単に述べる。

1　文末焦点[16]

節は一個の情報の単位 unit of information に対応し、音調の上からも一つの単位 tone unit になっていることが認められるが、その情報の焦点 information focus は通例節の文末に来る。これを文末焦点 end-focus と呼ぶが、それは文末の名詞・形容詞・動詞・副詞等のいわゆる開かれた類に属する語にその情報単位にかぶせられる

音調単位の最も強い強勢すなわち核 nucleus が落ちることにより示されている。この文末焦点が末尾にある限り、その節ないし文は無標であるとされる。すなわち、強調の意義が加わらない。それに対して、文末から焦点が移動する時、対照焦点 contrastive focus となり、対照的強調の意義が生じると考えられる。

一般に、談話のコンテクストにおける文においては、全体が新しい情報である場合の中立的情報焦点と呼ばれるものを除けば、旧い情報が先に置かれ、新しい情報が後に置かれることが観察されている。[17] したがって、情報の焦点は新しい情報の所在個所を示していることになる。これは、たとえば、質問文が能動態であるにもかかわらず、答えの文では受動態が意図的に選ばれている次のような例が、その間の事情を示していると思われる。

(19) A: *Who* makes these chairs?

B: They're made by *Ércol*.

Bで、音調単位の核が Ercol に落ちていることにより、新しい情報の焦点がそこにあることが示されている。無標の文とするためにはこの受動態構文を取らざるを得なかったのである。

もし、*Ércol* makes them. とした場合は、新しい情報を示す焦点が文頭に移って、対照焦点が文頭の Ercol に落ちるので、Ercol という家具製作所の名それ自体が新しい情報として与えられているのではなく、それは既知の項目であって、前提として文脈において既に与えられているはずの、他の製作所との対照関係の中で選択されたものとしての Ercol という情報が、新しいことを示しているのである。そこで、有標の文となる。したがって、その場合は、質問の焦点も当然違ってこなければならないであろう。

文頭に旧い情報を示すものが置かれるという傾向は、存在文における新しい情報（不定の事物）が、やはり、後位置に移され、代りに意味のない there が主語の位置に置かれているという事情を説明するものである。

2　後重性[18]

情報単位すなわち節において、その文頭と文末は重要な位置で、この位置に、その単位の中で比較的重い要素が置かれている。イエスペルセン O. Jespersen はこれを均斉 relative weight と呼んでいる。[19] しかし、一般的

に言って、英語では、文頭よりも文末が一層重くなるという、後重(あとおも)end-weight の傾向が見られる。たとえば、

(20) *That he was prepared to go to such lengths* astounded me.

(21) I was astounded *that he was prepared to go to such lengths.*

のような場合、(20)よりも(21)が選ばれる傾向のあることを見る時それは明らかである。

1で見たところの、文末に焦点を置こうとする傾向と、ここで見た、文末を文頭に対して重くしようとする傾向の二者が、英語において、文構成の統合型のいかなる型を選ぶかという時の、重要な基準となっているように思われる。

3 主題の有標化[20]

情報単位すなわち節の文頭は、文末と並んで、最も重要な位置であるが、この位置に立つ要素を主題 theme[21]と呼ぶ。それは文法上或いは論理上、心理上の主語とは必ずしも一致してはいない。それは情報単位における情報内容の導入部となっていて、いわば表現上の主語となっている。この主題の位置に有標化を伴なわずに入り得るものは、平叙文の主語、一般疑問文の助動詞、疑問詞で始まる疑問文の疑問詞要素、命令文の本動詞、及びいわゆる副詞的目的語となるもの以外の副詞句などである。これらは無標の主題 unmarked theme と呼ばれる。

平叙文において、この主題の位置に目的語・補語・副詞(句)・前置詞の目的語・本動詞など〝期待せざる〟要素が入って有標の主題 marked theme を形成する。その場合、核を示す強勢がそこに置かれ、強い強調の意義が加わるのである。この種のものには古語法もかなり見られる。なお感嘆文における語順変換も同様に考えてよいと思われる。

(22) *Quite a spill* [*i. e.* a fall from an erect position] you took, Oliver. (E. Segal, *Love Story*) (OSV)

(23) *Into the speech of the English,* harsh and guttural, came, little by little, a whole host of words from the softer French tongue. (G. H. Vallins, *Words in the Making*) (AVS)

(24) *More significant was the fact* that Jenny had

been mentioning that she was dating me. (E. Segal, *Love Story*) (CVS)

(25) *Often had I* intended to speak of it. (AVS)

(22)のような例では語順の倒置は起らないのであるが、(23)(24)(25)では倒置が行なわれている。(24)の例には前項で見た後重性の影響が見られる。なお存在文における倒置については2で触れたが、ここで注意すべきは There are our friends. に対する There they are. の対立があることである。人称代名詞は軽い要素なので、後重性の原則の適用を受けることになり、SV の順を保つ。

この主題の有標化には古い時代の残存形が多く残る傾向があり、そのためにここには種々の文体的レベルの混在が見られる。すなわち、たとえば(22)のような例は口語的であり、(25)の例などは文語的な例である。また、次のような例は文語的または古語法的と考えて良いであろう。

(26) Should you change your mind, no one would blame you.

このように、種々の情報が語順に託されていることを見ると、語順から、文の意味内容については勿論のこと、文体のレベル、或いは新・旧語法に対する話者或いは作家の言語感覚、成立年代等についての情報、或いはそれが意図的な使用であれば、その意図等を窺うてだてまで得られるに違いないことが明らかになるであろう。なお、アメリカ英語・イギリス英語で間接・直接目的語の語順が若干異なる場合がある。それについての議論はまた別の機会に譲らざるを得ないが、それなどからは、さらに方言的な彩りについての情報まで得られることになるのである。

六　おわりに

英語の語順の担う機能について、色々な角度から照明を当てようと努めてきたが、色々な問題がそれに含まれていて、必ずしも十分な説明になり得なかったことを恐れる。言語の音的性質の故に線条性をもつこの言語のその性質を最大限に生かして、種々の情報を盛りこむ、その時の話者の心理の面まで解きほぐすことは中々難しい。しかし、語順の根本的意味が、思考や情意表現の乗物になり得るところにあることは確かである。或いは表現の

溝になる所にあると言えよう。要は、この溝を伝って流れてくるその水源の発話者なり、作家なりの元の意識内容に迫り、それを自らの心内に再構築する、その術を与えてくれるところの存在たり得ると考えられることである。発話の意味と文の意義とをわれわれは区別してきたが、最終的にはこの発話者の個人的実質である発話の意味に迫らねばならぬ。それぞれの「文章と歌の、いひざま、いきほひを、精細に見分け、語の深さ浅さ、をかしさうれたさ」を、正確に把握するために、是非とも、語順の機能に対する観察が必要となってくるのである。

古英語の非人称構文の人称構文化の問題等扱わなければならない問題をいくつか残してしまった。これらについてはまた稿を更めて述べたいと思う。

新一年生諸君に、この拙ない一文が、何かの参考になれば幸いである。

(1) 服部四郎『言語学の方法』岩波書店、一九六〇年、三二頁。なお術語も専ら同書による。

(2) G. L. Trager and H. L. Smith, *An Outline of English Structure*, 1951.

(3) // は音素を示す。音声記号〔 〕と区別する。

(4) 《 》は意義素を示す。

(5) A. A. Hill (ed.), *Linguistics* (VOA Forum Lectures), 1969: 宮部菊男監訳『現代言語学』研究社、一九七一年、六三頁以下。

(6) 前掲書、第五章。

(7) 発話の「意味」の社会習慣的意義特徴を、該当する文の「意義」と言う。以下、「統合型の意義」なども同様。

(8) C. Watkins, "Preliminaries to the Reconstruction of Indo-European Sentence Structures", *Proceedings of the 9th International Congress of Linguists*, ed. by H. Lunt, Mouton, 1964, 1035–1045.

(9) 久野 暲『日本文法研究』一九七三年、第一章。

(10) 服部四郎、前掲書、一九七・八頁。しかし、いずれにせよ、「主部＋述部」の語順が一般的であることは、われわれの思考形式との対応関係の存在を暗示するものと考えることを可能にすると言えよう。

(11) C. C. Fries, "On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English," *Language*, XVI (1940), 199—208.

(12) J. Bosworth and G. Waring, *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale*, London, 1888.

(13) ゲーツ数、行数は B. Thorpe, *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*, I. London, 1844 による。

(14) Cecily Clark (ed.), *The Peterborough Chronicle 1070—1154*, 2nd edition. O. U. P., 1970.

(15) ページ数、行数は G. Shepherd (ed.), *Ancrene Wisse*, Thomas Nelson and Sons, 1959 による。

(16) 以下の術語は R. Quirk, et al., *A Grammar of Contemporary English*, Longman, 1972. pp 938 ff による。

(17) 久野暲、前掲書、第三十章。

(18) R. Quirk. 前掲書、九四三頁以下。

(19) *MEG.*, VII, §§ 2 ff.

(20) R. Quirk. 前掲書、九四五頁以下。

(21) 泉井久之助「語順の原理」『国語国文』第24巻8号では「疑項」と呼ばれている。なお、同論文から多くの示唆を得たことを、感謝の意をこめて記しておきたい。

(一橋大学助教授)